

アフリカからアートを売り込む

研究と企業の活動から考える現状と展望

登壇者プロフィール(発表者順)

小川 弘

株式会社東京かんかん代表取締役。1976年、東京芸術大学美術学部大学院ヴィジュアルデザイン科卒業。著書に『アフリカのかたち』(里文出版、1999年)、『Isolation ドゴンの光』(水声社、2018年)など。1980年頃からアフリカ各地に出かけ40年近くアフリカ美術作品を扱う。アフリカ美術展多数開催。

川口 幸也

立教大学教授。専門はアフリカ同時代美術、展示表象論。著書に『アフリカの同時代美術』(明石書店、2011年)、訳書に『美術館という幻想』(水声社、2011年)など。展覧会に「インサイド・ストーリー」「彫刻家エル・アナツイのアフリカ」ほか。

柳沢 史明

東京大学大学院人文社会系研究科助教。専門は芸術学、植民地文化論。主著に『〈ニグロ芸術〉の思想文化史』(水声社、2018年)、共編著に『混沌の共和国』(ナカニシヤ出版、2019年)がある。

緒方しらべ

国立民族学博物館外来研究員。専門は文化人類学・アフリカ地域研究。主著に『アフリカ美術の人類学:ナイジェリアで生きるアーティストとアートのありかた』(清水弘文堂書房、2017年)がある。

安斎 晃史

株式会社バラカ営業部部長。原材料ではなく、製品の輸出で、アフリカ経済発展の一翼を担おうという主旨のもと、タンザニア製品(ティンガティンガアート、食品、雑貨、アフリカ布等)の輸入&プロモートを担当。

板久梓織

首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻 社会人類学分野博士後期課程・日本学術振興会特別研究員(DC2)。現在、ケニアでソープストーン彫刻産業とグシイ社会を調査中。

20世紀後半以降、アートに関する議論や学問状況は目まぐるしく変化しました。西洋の美術やアートを中心とした考え方・語りは相対化され、市場は多国籍化・多ジャンル化し様々な地域や人々の作品へと関心が向かいました。しかし、文化的価値の相対性が認識され、その必要が叫ばれる一方で、現在、アートの領域における「アフリカ」をめぐる状況はどの程度変化し、それに対する認識はどの程度浸透しているのでしょうか?大学や美術館等でアフリカに由来するアートを研究・展示するという選択肢は決して多いとはいえず、日本においてはむしろ学生数の減少や財政難の煽りを受け、そうした試みそのものが以前よりも困難となってきているのかもしれません。こうした状況には、「アフリカ」と「アート」とを繋ぐことをめぐる学問上の歴史や議論が少なからず関わっていますが、アフリカに由来するアートに対する関心を美術界や学界へ、さらにはより多くの人々へとアピールする方法をいまいちど多角的に再考することも可能なのではないでしょうか。

そこで本シンポジウムでは、研究者だけでなく企業で活動されている方々にも協力を依頼し、アフリカに由来するアートを日本国内に向けて「紹介」「プロモート」「販売」する作業の歴史、現状、展望、研究成果等を報告いただき、上述してきた課題に迫ることを目的としています。様々な活動・研究領域を事例に、サハラ以南のアフリカに由来するアートを日本の学界へ、市場へと「売り込む」ために、またさらなる関心を掘り起こし、かき立てるためにはどのような経路があり、何が必要であり、何が可能であるのか、さらにはアートシーンや芸術研究における多国籍化やグローバル化の現状について共に考えてみませんか?